

☆ 言語障がいのある子どもの理解のために

言語障がいを理解するために、基本的な事項について、「障害のある子供の教育支援の手引」を参考にしてまとめました。



「言語障がい」とは

言語障害とは、発音が不明瞭であったり、話し言葉のリズムがスムーズでなかったりするため、話し言葉によるコミュニケーションが円滑に進まない状況であること、また、そのため本人が引け目を感じるなど社会生活上不都合な状態であることをいう。

<言語障がいの分類>

- ① **耳で聞いた特徴に基づく分類**・・・発音の誤り、吃音など
- ② **言葉の発達という観点からの分類**・・・話す、聞く等言語機能の基礎的事項における発達の遅れや偏りなど
- ③ **原因による分類**・・・口蓋裂、聴覚障がい、脳性まひなど

<構音障がいの分類と状態>

構音障がいとは話し言葉の使用において、「さかな」を「たかな」、あるいは「たいこ」を「たいと」などのように、一定の音をほぼ習慣的に誤って発音する状態をいいます。

【①原因による分類】

○器質性構音障がい

口唇、舌、歯等の構音器官の構造や、それらの器官の機能の異常が原因となつて生ずる構音障がいである。

○機能性（発達性）構音障がい

聴覚、構音器官などに器質的疾患がなく、成長過程での構音の習得において誤った構音が固定化したと考えられる障がいである。

【②音声的な特徴による分類】

耳で聞いた際の音声的な特徴から分類すると、構音障がいのタイプとしては次のようなものが挙げられます。

置換…ある音が他の音に置き換わるタイプ。
(例)「さかな」([sakana])を「たかな」([takana])と発音する。

ひずみ…ある音が不正確に発音されている状態で、日本語にない音として発音される。音声記号で表すことは難しい。
(例)「[ka]と[ta]の間」など。

省略…必要な音を省略して発音するタイプ。
(例)「ラッパ」([rappa])を「アッパ」([appa])等と発音する。

オサカナ
見たのね

オタカナみたよ



年齢が上がるにつれて誤った発音の仕方が定着し、緊張している場合もあります。そのような時は無理をせず、まずは、本人の緊張をほぐすところから始めましょう。

* 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課「障害のある子供のための教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～(令和3年6月) P217～

＜吃音の状態や特性＞

【吃音】

自分で話したい内容が明確にあるにもかかわらず、また構音器官のまひ等がないにもかかわらず、話そうとするときに、同じ音の繰り返しや、引き伸ばし、声が出ないなど、いわゆる流暢さに欠ける話し方をする状態を指します。現在のところ、原因は不明です。

吃音のある子供の話し言葉の状態

語頭音の繰り返し (連発)

話するときの最初の音や、文のはじめの音を何回も繰り返す話し方。吃音の初期の段階に多く、幼児期によくみられる話し方。(例)「ぼ、ぼ、ぼぼ、ぼくは・・・」

語頭音の引き伸ばし (伸発)

話するときの最初の音や、文のはじめの音を引き伸ばす話し方。(例)「ぼおーーーくは・・・」

語頭音の阻止 (難発)

語のはじめだけでなく、途中で生じる場合もあり、声や語音が非常に出にくい状態。比較的進行した吃音に多いと言われている。

吃音の特性

特性①「吃音状態の変動」

子どもの状態は、日によったり、場の状況や相手、話の内容により変動するものである(『吃音の波現象』と呼ぶ)。実態把握に当たっては、本人の様々な状況での発語行動(発語に伴って生じる随伴症状も含めて)を観察し、検討しなければならない。

特性②「人や場面に対する恐怖や回避」

苦手、避けて通りたいと思う特定の場面(音読や、電話をかける場面など)を意識的に又は無意識的に避けようとする子どももいる。今までに失敗した経験の積み重ねの結果であろうと思われる。

特性③「随伴症状」

発語に伴って生じる身体運動(まばたき、体をゆする、足踏み、首振りなど)のことを随伴症状と呼び、これも吃音症状が進展した子どもに特徴的なものである。

特性④「社会性の発達・自己肯定感に対する影響」

子どもの社会性の発達や自己肯定感にも、吃音は重大な影響を与えることになりやすい。したがって、以下の点に留意が必要である。

- ・ 本人の吃音に対する受け止め方。
- ・ 保護者や学級担任、級友等の吃音に対する感じ方、本人に対する感じ方及び態度。



自由で楽な雰囲気の中で、話しやすい人が相手であれば、子どもは流暢に、あるいは軽い吃音状態を伴いながらも、楽に話せます。ですので、吃音のある子どもたちへの指導では、

- ・ 話しやすい環境づくり
- ・ 「楽に話せた」という感触を得ることができる経験の積み重ねが必要です。まずは、子どもとの「雰囲気づくり」から始めてみましょう。